少人数指導の在り方に関する一考察

― へき地・小規模学校及び中・大規模学校における取り組みの工夫 ―

田　島　與　久
（北海道教育大学札幌校）

村　上　浩一朗
（様似町立様似中学校）

An Ideal Method for Small Group Lessons

– A Plan of Action for Rural Small School and Medium, Large Scale Schools ―

Tomohisa TAJIMA and Kouichiro MURAKAMI

1　はじめに（研究の意図）

子どもたちの学習状況などの実態や地域の実情に合った効果的な指導のため，個に応じたきめ細かな指導を行うことができるような学級編成や教職員配置が求められている。

こうした中，第６次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画（平成５～12年度）では，学校において複数教員による協力的な指導（ティームティーチング）が行えるようになるとともに，第７次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画（平成13～17年度）では，これまでの配置や方法に加え，習熟度別授業や教科等に応じた少人数指導が可能となった[1)]。

一方，いわゆるへき地・小規模学校においては，従来から少人数による学習が行われており，その少人数であるというメリットを生かしたきめ細かな指導が行われている。しかしながらその反面，交流や練り合いが不十分であるというデメリットがあり，その解決のための得策も見いだせない状況である[2)3)]。

そこで，教職員配置改善に伴って中・大規模で行われている少人数指導と，へき地・小規模学校での指導との比較により，個別指導の在り方やお互いのメリットを相互に生かす工夫，さらには，それによって学力の向上策などについても考察していく。

2　少人数指導が行われるようになった背景～教職員配置改善の動き

平成４年度より，小学校から順次全面的に実施されている学習指導要領は，心豊かな人間の育成，基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実，自己教育力の育成等を基本的なねらいとしている。

従って，これからの教育においては，児童生徒一人一人の可能性を伸ばすことをその根底に据え，自ら学ぶ意欲や思考力,判断力,表現力などの能力の育成を基礎的・基本的な内容の中核をなすものとして捉え，それを児童生徒一人一人の自己実現に役立つよう身に付けさせることが肝要となり，これまでの知識や技能を共通的に身に付けることを重視した教育から，児童生徒が自ら考え主体的に判断し行動できる資質や能力を育成する教育へと，学校教育の質的改善が求められた。

このため，児童生徒一人一人を全体として把握し，興味・関心，能力・適性，思考力，判断力，表現力等の一人一人の特性等に応じて多様な指導法を工夫するなど個に応じた多様な教育を展開することの重要性が示された。

平成５年度から，個に応じた多様な教育の展開のために，新しい指導方法を実施するための教職員配置（第６次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画）がなされ，加配教員を活用し,学習の進度や理解の程度,あるいは,学習課題等に応じて，複数の教員が協力してグループ指導，個別指導等を実施するようになった。

また，平成13年度からは，児童生徒の「生きる力」をはぐくむためには，よりきめ細かな指導が必要との考えのもと，多様な指導形態や指導方法の導入を目指し，学級単位での学習指導だけではない学習集団での弾力的な指導も可能にした[1)]。今日では，各学校において，それぞれの特色ある教育課程の編成に基づき，ティームティーチングによる指導や少人数指導などの個に応じたきめ細かな指導が行われている。

現在，習熟の程度の差が顕著な算数・数学や英語，あるいは解決方法が多様に考えられる理科,社会に加えて,

総合的な学習の時間等において，多様な指導形態や指導方法を効果的に導入できるような仕組みも考えられている。（第８次公立義務教育諸学校教職員配置改善計画平成18年度～）[1)]

3　へき地・小規模学校における学習指導の実態と課題の改善

多くのへき地・小規模校は少人数で学習が行われている。その中での課題等について考えていく。

⑴　少人数での指導のメリット

へき地・小規模学校においては人数が少ないため，一人一人に目が届き，学習指導上のつまずきをとらえた指導や解決方法が異なった場合の指導，さらには，学習課題別の学習にも対応できるなど，個々の児童生徒に則した指導が可能である。

また，机間指導などにおいて，一人一人の学習の進行状況や理解の程度，解決の適不適や巧拙などの把握とそれに応じた指導が瞬時に可能である大きな長所がある[2)3)]。

⑵　少人数での「個に応じる」とは

「個に応じられる」の「個」とはなんであろうか。

能力・適性のうち能力では，習得した知識や技能の量や巧みさ，理解や解く速さなどであり，興味・関心の有る無しや高さなどである。それに加えて思考力，判断力，表現力についての力量や，自ら学ぼうとする，自ら考えようとする意欲や態度についても個の実態としては考慮せねばならない。

こうした個の実態を把握するには，普段から少人数で行える小規模学校は１クラス30人以上の学級と比べると容易であることは言うまでもない。しかし，実態を把握することはできたとしても，その実態に応じてそれぞれの力量を高める，また不十分であればまたそれを補う指導を即行うことができるであろうか。

そうした実態を本人自身が気付くには，それなりの集団の中で，子供同士の交流ややりとりの中で可能となることが多く，また，課題を克服したり意欲が高まるのは，教師からの進言や助言よりも，子供同士の刺激や自覚によることの方が多くまた望ましいのではないだろうか。また，子供同士のことで言うと，小規模学校では相互交流の相手が限定されるため，生活経験や学習経験が豊かにならず，発展性に乏しい傾向を持つことから，子供同士の刺激や激励についても限定される。こうしたことから，少人数イコール「個に応じ」，「高める」とはなかなかなり得ない実態が小規模学校には存在する。

⑶　へき地・小規模校における学びの改善

少人数であるがゆえの，活発な討議が展開できにくい，学習経験が豊かにならず発展性に乏しいなどのデメリットを克服するための学び方の活路とはどういうものであろうか。

ア　個の学びの確立

少人数の中であっても，一人一人の学びが確かなものになるための授業が重要である。また，少人数であっても複数であることを生かす授業が大切である。

前者として有効な手段は，一つとして自己学習力の習得であり，それは，①基礎的な学び方（学習のしつけ）②基本的な学び方（学習展開のしつけ）③創造的な学び方（思考の仕方・しつけ）からなる[2)]。

今一つは，教材の選択と工夫である。教材は，「児童生徒一人一人が，自分の課題を見つけたり，自分の考えを引き出し，練り上げて問題を解決していくために，主体的にかかわり学習を成立させる基となる貴重な素材」であることが重要であり，子どもたち一人一人が意欲をもってその教材にかかわっていくことで，たとえ数人の学習であっても，一人一人の学習が拡がり，深まっていくことによって個々の高まりを期待できる。このことは，中・大規模学校における少人数グループ学習にも多いに参考になるものと考えられる[3)]。

後者にある，少人数であっても一人ではない複数による学習であることを生かす手段としては，子ども３～５人による学習結果の吟味や交流を設定することは可能であるが，そのことの有効性は少ない。むしろ，理解の浅深や速さ，習熟の程度に応じた準備や想定を教師の教材研究の重要な視点として位置付けることである。

複数からなる理解の程度の押さえや仮説の設定，学習の進度や深さを高めるための工夫の考察，身に付けた知識や技能を発揮したり活用する場面を能力や習熟の程度に応じて想定するなど，複数通り準備し考察することが大切である。またそのことが，中・大規模学校のコース別学習のコース設定の規準の決定や指導場面での対応，及び評価に大いに生かされると考える。

イ　学習の個別化と集団化

デメリット克服の２つとしては，少人数であることをしっかり認識しながら，学習の個別化と集団化のそれぞれの意義を生かす指導とそれらを組み合わせた指導を工夫することである。

個性や能力の伸長を図り自己学習力を育てる教育を推進するためには，基礎的・基本的な内容を身に付けさせ，問題解決的な学習を重視した指導過程の工夫を図ることである。

基礎的・基本的な内容の習得には，まず少人数であることのメリットを最大に生かすべきである。問題解決的

な学習としては，学習課題や解決のコースを児童生徒が選択したり，学習の順序や組み合わせの選択，あるいは，児童生徒自身に自分の学習課題を設定させるなど，自己決定の機会や場を保障するとともに，興味・関心，知識，経験などに応じて主体的に学習を進められるようにするなどの，指導過程や学習形態の工夫が大切である。個々の問題意識や解決方法の特徴など，一人一人の問題解決をできる限り保障していく教師の姿勢が，個々の学びを高め学習の拡がりや追究の深さを生むことになると考える。

集団化については，２個学年や全校での合同学習，交流学習，へき地小規模校と中・大規模校との遠隔授業などが実践されているが，それぞれに隘路がある。２個学年や全校での合同学習は，それぞれの発達段階や能力・習熟の状況を踏まえた上で，一人一人の何を伸ばすか，どのような意欲を高めるかの見通しと指導方法の吟味が大切である。また，交流学習や遠隔授業では，体験の幅を拡げ，異なった見方，感じ方，考え方に触れることによる充実感，大きな集団でしか味わえない刺激や新しい発想の気付きを醸成する指導の工夫など，上記三つの学習方法の意義を踏まえた上で，学習の目的と指導方法，培う力や態度を明確にした取り組みを期待する。

4　中・大規模学校における少人数指導の改善

平成14年，文部科学省から「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」が出され，少人数・習熟度別指導など，きめ細かな指導で基礎・基本の確実な定着を図ることの重要性が指摘された。

平成15年には，小学校における習熟の程度に応じた指導，補充的な学習や発展的な学習の導入の必要性が示された。

また同趣旨のもとに，平成14年度学力向上フロンティアスクール事業(全国805校)が開始され，ティームティーチングや少人数指導に多くの学校が取り組んだ[4)]。

中・大規模学校における少人数指導において，へき地・小規模校における指導の工夫に学ぶべき点は多い。特に個々の学び方の確立や問題解決的な学習の工夫に見られる点である。

⑴　少人数指導の長所を生かす

へき地・小規模学校の例に見るように，少人数では教師の目は行き届き，一人一人への指導が徹底するというふうに捉えているのが一般的であるようである。

しかし，教師の目が行き届くことによるこまめな指導が果たして子どもの成長にとって有意義なのだろうか。子供から見た長所に，

・分からないことが質問しやすい。
・学習していることがよくわかる。
・いろいろな方法で学習できる。

などが上げられている[5)]。分からない時やつまずきに即対処できる長所は大いに生かすべきである。反面，教師を頼り過ぎる，あるいは，じっくり考えることをしなくなるという指摘もある。少人数であっても，時には突き放す，自分で考えることを習慣づけるなど，短所面の課題を克服する実践の積み上げに期待したい。

⑵　少人数指導の目的・方法を生かす

平成５年の第６次の計画で「定数加配の対象となる指導方法の範囲等」に示されている（例）[1)]のうち，“興味・関心等に応じて”に比べて，“習熟の程度等に応じた学習”の実践がはるかに多い。習熟の程度に応じて，子どもに分かりやすい授業を展開したり，個に応じた発展的な内容を取り上げたりする（習熟度重視型）学習は大変意義あることであるが，それとともに，子どもの追究したい課題や追究方法を自己選択する（興味・関心型）実践についても，同様に大いに取り組まれ，追究の幅や深さを保障してより大きな学習の成就感を得させたいものである[6)]。

⑶　ティームティーチングの有効活用

平成13年度からいわゆる少人数指導のための加配教師が措置されるとともに，非常勤講師を採用する市町村も多くなり，他方，地域の専門家や大学生等のボランティアの協力を得られるようにもなってきている。指導の効果を高めるため，あるいは，学力向上や児童生徒の充実感・達成感を高めるための工夫が数多く実践されている。複数の指導者が存在することの最大のメリットは，観察や評価に対する少し多くの眼，言葉かけやアドバイスなどの少し幅広い対応が可能となることである。つまずきに対する少し早い発見や担任一人では見いだせなかった子どものよさを見つけることを主眼に置きたい。

習熟の程度等に応じて，単位時間のある部分で，あるいは時間の初めから複数の教師で指導している実践も大変多く見られるようになってきた。打合わせの時間確保やコース分けの際のテスト・評価の工夫などを実践校では確実に積み上げている。さらには，指導や子供の記録等をこまめにとって，次の年の年間計画に生かしている取り組みも見られる[4)]。そうした協力・協業の取り組みが貴いし，複数の眼や術で一人一人の子どもの学習の成立に心をくだく精神や意欲を大切にしたい。

5　「中・大規模学校の少人数指導」の小規模学校への適用

⑴　補充的な学習と発展的な学習

補充的な学習では，例えば，算数科においては，

① 同一または類似の内容を必要に応じて繰り返し学習する。

② 同じ内容を別の場面，別の方法などで調べたり確かめたりして学び直す。（多面的な学習）

③ 作業的・体験的な活動など算数的活動を繰り返し行うことで，数量や図形についての感覚を豊かにしたり，意味理解を深めたり，考える力を高めたりする。

などの方法がある。このような方法の理解を踏まえて，学級の全員で同じように補充的な学習を行うことがあり，また，個別学習やグループ別学習によって，それぞれの子どもに応じた繰り返し学習を行えるようにすることもある[7)]。

こうした方法は，大規模校における全体指導及びコース別指導に限らず，小規模校でも有効である。

個に応じた学習の一環として，発展的な内容を学習できるようにする工夫も重要である。子どもの中には学習した内容が身に付いていて，それをさらに別の場面で活用してみたいとか，数学的に発展させてみたいと思っている者もいる。そうした子どもたちの学ぶ意欲をさらに高めるためには，また自ら学び考える力をさらに高めるために，発展的な内容を学習できるようにする指導の工夫が大切である[7)]。

小学校では平成17年度から，中学校では18年度から使用される新しい教科書においては，そうした内容も掲載されている。その際には，子どもが必ず学習する基礎的・基本的な内容（学習指導要領に示している内容）との関連に留意しながら，子供自らが発展させていく学習活動が可能となるように，学習場面の設定や指導の方法を工夫していくことが大切である。

こうした，補充的な学習や発展的な学習は，一斉・全体学習の後に，習熟の程度や興味・関心に基づいてコースやグループに分かれての学習というケースが多くなるが[4)]，テスト・評価等による安易な振り分けにせず，もう一度確実に身に付けたいために補充のコースへ，あるいは，幅広い考え方で様々な学習に挑戦したいなどの児童生徒個々の気持ちや学びの意思・姿勢を大切にしたいものである。

こうした取り組みは，中・大規模校のみならず，小規模校においても可能であるし，複式学級においても２個学年の中で習熟の程度や解決・学習の意思等に応じて，補充的学習や発展的学習を大いに取り入れ，個の学習の満足度や力を引き上げる努力を行って欲しい[8)]。

⑵　異学年セットのカリキュラム

習熟度別学習は３年生以上で行うという主張がある。その中で，単元の内容に応じて，３年生と４年生，４年生と５年生，５年生と６年生という組み合わせをとるというケースも紹介されている。この内容を次に示す。

２学年の内容を系統立てて連続させ，時間的にも集中して取り組ませる。下の学年にとっては先取り学習になり，上の学年にとっては，普通の学習プラス確実に理解・身に付ける学習となる。子どもはじっくり，深く考えられる反面，授業が進むともに理解度や習熟の度合いで個人差がはっきりしてくるため，十分丁寧なコース別指導が必要になる。２クラスを３コースに分けて行っており，学習内容や到達度がそれぞれの子どもで違っていても，学習に対する満足度が一様に深いものになっているようである[4)]。

こうした実践は，へき地・小規模校の複式学級において，基本的に算数科で学年別指導を行っている場合，年間を見通し２年間で１セットのカリキュラムを有効に活用し，学習に対する満足度を高める実践として取り入れたいものである。複式学級では，自ずと２学年の教材研究を行っているのであるから，内容を連続させたり，類似内容を工夫したりして，実践可能であろう。また，カリキュラムをセットにするわけではなく，下学年の基本的な問題を２つの学年で解くことで，基本を確実にするとともに，学習の意欲や励みを持たせたり高めたりすることも有効であろう。学年に関係なく，不十分であれば基本から繰り返して行い，習得・クリアーできれば新たな問題に挑戦（自主学習）する方向に進むこともできる。

⑶　ホームページによる開発教材の紹介

学力向上フロンティア校では，公開研究会の開催をはじめ，コース別学習や少人数指導の工夫，さらには，学習の定着のための補充的な学習や発展的な学習など個に応じた教材の開発も少なくない。それらの指導の工夫や開発教材を学校のホームページなどで積極的に紹介するとともに[4)]，他校などと情報を共有化することが大切である。補充的な学習では，繰り返すやりかたやドリル教材だけではなく，子どもが自らの学習をふり返る場としての教材を提供したい。また，発展的な学習では，先取りの内容ばかりではなく，内容を深める教材，じっくりと考える教材，これまでの学習との関連が見えてくる教材がよい。そしてこうした教材は，複式学級の間接指導の際の自主学習として有効に活用できると考える。

6　おわりに（小規模学校の課題克服のために）

小規模学校では，間接指導での交流や，全体での練り合いが不十分，難しいという声をよく聞くとともに，これらは以前から強く指摘されている課題である。発表力は小集団ではつかないのだろうか。練り合いに必要な人数がいない，足りないから考えが深まらない，高まらないのだろうか。

加配教員がいないから少人数指導ができない，余裕教室がないのでできない，という声も聞く。本来いかなる学校であっても，その学校の条件下で精一杯の努力と工夫をすることが大切である。

たとえ指導者が一人であっても，学級内で習熟度別学習を進めるなど，できる範囲で指導方法を工夫したい。習熟度別の少人数指導は，同レベルの，しかも少ない人数で構成される集団に対する指導であり，指導技術から見れば，比較的容易な指導方法である。多様なレベルの子どもで構成される，多人数の集団において学力向上を図る，学習意欲の向上を図る，そうした指導力を併せて身に付けるようにしたい。

子どもの学力を向上させるために，学級や学年において,少人数の小集団を再編成することが一般化してきた。これにより，教材を多様に作成して，子供の学習状況に応じて提供する姿が見られるようになった。コース分けにした時，Ａコースはどういう課題にするか，Ｂコースは，Ｃコースは，という課題の吟味。そしてそれぞれの指導過程はどのように。３コースで２人の教師しかいない場合，自主学習はどのように，というように具体的な指導内容・方法についての議論や研究が大切である。そのことが,多人数を一人で指導する時にまた生きてくる。

一般的に授業では，提示した課題や問題に対して，子どもの反応や解き方の予想を教師は行っている。その後の対応がスムーズに行うことができ，また活発な学習になるためには，数多くの“反応の予想”を考えておくことが望ましい。子どもが３人のクラスであれば，その数以上の“反応の予想”を教師が用意すべきであり，また，そうした多くの解き方や仮説が生まれるような課題を準備すべきである。このことが，多様な考えに触れたり，交流を充実したものにすると考える。練り合いについても多人数で行うようにはならないが，これまでよりは充実したものになるはずである。

２，３個学年合同の学習や集合学習では，多くの友達と学び合うことの楽しさを味わうことによって学習意欲が向上するという大きなメリットがある。一人一人の学びを確かなものにする，また，知識や技能の確実な定着を図るということについては，少人数の方が優れているということが,学力向上フロンティア校の実践をはじめ，広く理解されてきている。このことは，へき地・小規模学校が,そのことを日常的にでき得ることを示している。このことを，担当の教師は強く認識し，そのノウハウを十分に生かす実践を行って欲しい。そうした実践の上に立って，多くの人数による学び合いや刺激，練り合いなどのあるより確かな学びについての研究・追求を望む。音楽，体育などの技能・芸能教科だけでなく，国語，算数などにおいても合同学習や集合学習を設定し，子どもの学力や学習意欲をより高める実践を大いに期待するものである。

引用・参考文献

1　文部科学省「教職員定数の在り方に関する調査研究協力者会議」1992年１月　「今後の学級編制及び教職員配置について」2005年10月

2　学習指導方法の工夫・改善　全国へき地教育研究連盟　1998年10月

3　へき地・複式・小規模学校Ｑ＆Ａ　全国へき地教育研究連盟　2000年９月

4　総合教育技術第59巻第14号　特集これでいいのか？「少人数・習熟度別指導」2005年２月　第15号　特集フロンティアスクール「果たして学力は向上したのか？」2005年３月　小学館

5　授業研究21　No.571　少人数指導のメリット・デメリット　2004年６月　明治図書

6　教職研修　通巻396号　特集少人数指導と少人数学級編成　2005年８月　教育開発研究所

7　吉川成夫「算数科における基礎・基本の定着と個に応じた学習指導」初等教育資料 No.758　2002年８月「基礎・基本を身に付け発展させる算数の学習指導」初等教育資料 No.770　2003年７月

8　玉井康之「へき地・小規模校教育研究の領域と現代的な可能性」へき地教育研究第60号　2006年２月